

## 科学の国では国語教育を重んずる

ついでにいいますが、日本では、理科学習を一年生から始めており、45分授業で、一、二年生が一週に二時間、三、四年生が三時間、五、六年生が四時間の学習をしています。ところが、ドイツでは、三年生まで理科がなく、四年生で二時間、五年生で三時間、六年生で四時間あるだけで、ことに三年生までは、国語教育に力を入れています。

これはどういうことかと、考えてみる必要があると思います。

科学を勉強するためには、先人科学者の著述や記録を、正確に理解する「読みの力」がまず必要です。自分で観察し、実験したことを、筋道立てて、詳しく記録する「書く力」も必要です。科学を進歩させるためには、まず「読み書きの力」を養わなければならないことを、かれらはよく知っているからです。

科学を進めるためには、国語の時間をさいてでも、理科教育の時間をふやさなければ、というような考え方では、科学は進歩しないのです。

## 石井方式の種あかし

こうして、外国の実例を調べてみますと、実に意外なことを主張すると思った石井方式は、実はすこしも意外な考え方をしているものではなく、それどころか、もっとも平凡な、もっともあたりまえの考え方をいっているにすぎないことが、おわかりいただけたと思います。

「石井方式の二原則」などと大げさにいいましたが、実は、外国では、あたりまえすぎて、それ以外のやり方など考えられないくらいです。それだからこそ、わたしは自信をもっていままでこの指導を続けてきたのですし、いま、自信をもって、どなたにもこの方式をお勧めできるのです。

では、1962年4月から、学校全体が石井方式を行なっている、新潟<sup>ふくろず</sup>の袋津小学校の実際をご紹介します。